

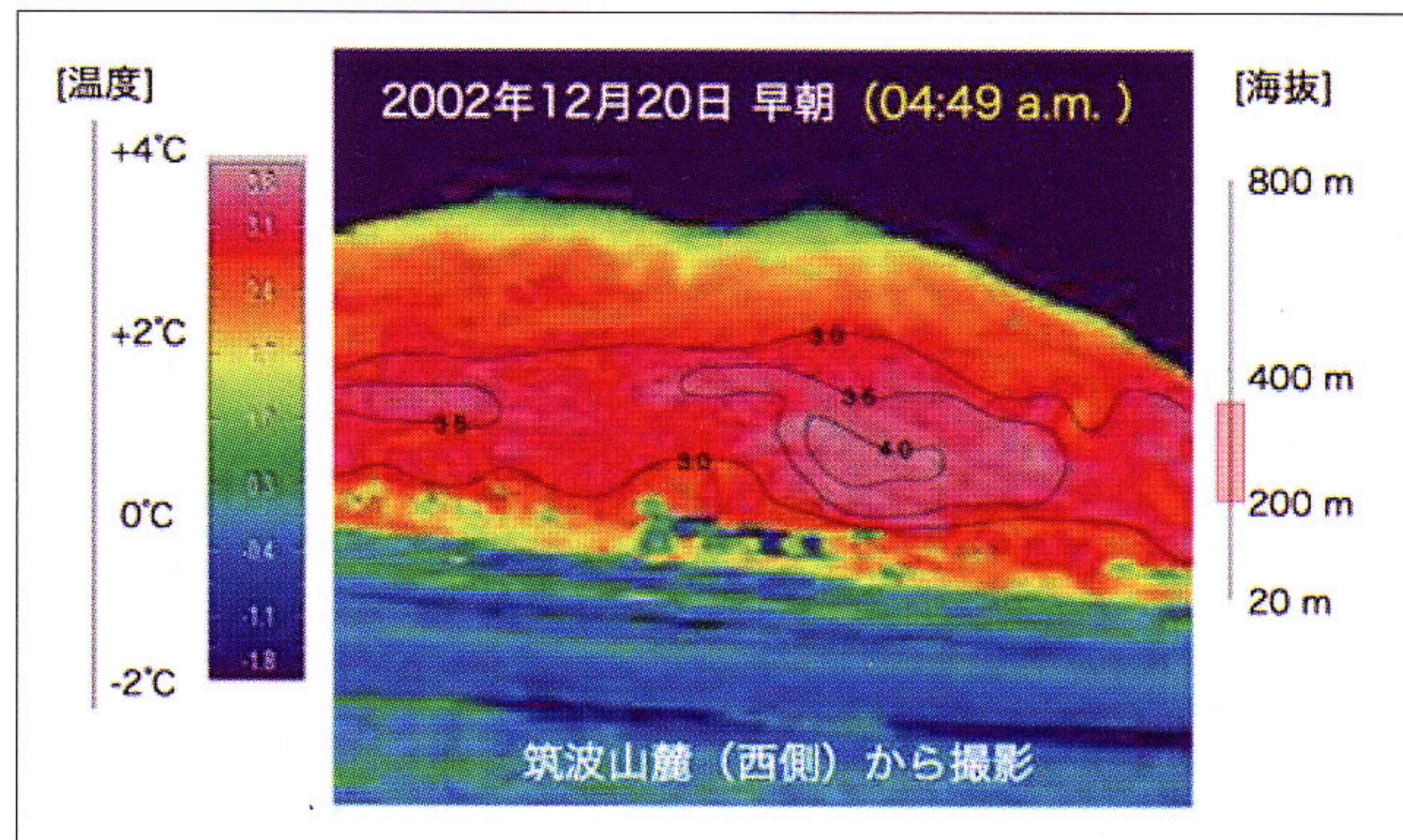
雲が語る筑波山の気候

一般に、標高が100m高くなるごとに気温は約0.6℃下がるため、筑波山山頂では、麓より気温が約5℃低い計算になります。冬には冠雪した筑波山が遠望でき、夏には山頂で少しだけ涼しい気候を楽しむことができます。しかし、筑波山ではこの標高と気温との関係が崩れることがあり、筑波山特有の気候や植生をつくる要因の1つになっています。

冬の朝に筑波山をみると、中腹に白い帯のような層雲がかかっていることがあります。この雲は、筑波山では山麓から中腹にかけて、気温が逆転している接地逆転層があることを示しています。この接地逆転層は、風の弱い晴れた冬の夜にたびたび現れます。このような夜は地表の熱が宇宙空間に放出される放射冷却の効果が強いため、地表付近の温度が低下して起こります。筑波山ではさらに、中腹の地表付近の空気も冷やされて重くなり、斜面に沿って下に流れます。その空間を補うために上空から空気が降りてきます。このとき、空気は圧縮されて温度が上昇するため、筑波山中腹（標高170～270m付近）は冬でも暖かくなります。この気候を利用して、中腹では寒さに弱い、ウンシュウミカンや特産のフクレミカンなどが栽培されています。（西山）



接地逆転層があることを示す層雲(下妻市横根から撮影)
(撮影：細谷正夫)



接地逆転層が生じたときの温度分布(熱映像写真)
(Ueda et al.,2003)

筑波山の天気にもつわることわざ

筑波山に笠(笠雲)がかかると天気が崩れる
(茨城県全般)



(撮影：細谷正夫)

筑波山を眺めながら生活してきた人々は、古くから筑波山と気象現象を結びつけてきました。とくに筑波山の雲と天気とのかわりかは、毎日の経験に基づいた「お天気俚語」として、それぞれ伝えられ、生活の指標とされてきました。

これは、筑波山が広範囲からみえる身近な存在であることに加え、独立峰としての色彩が強いため上空の気象状況が反映されやすいからと考えられます。これは、かつて男体山山頂にあった気象測候所が、100年以上にわたり関東地方の高層気象観測を支えていたことからもうかがえます。（西山）

朝富士に夕筑波は翌日晴れる
(関東全般)



第14回 いばらき自然環境フォトコンテスト
入選作品「落陽」 撮影：菅谷 勲

筑波山に雲がかかれば
天気が変わる
(栃木県南部)



(撮影：細谷正夫)

筑波山が見えれば天気良し
(栃木県南部)



(提供：小山市)